

## 忘れられない8月6日の記憶

上坊寺信蔵（当時21歳）  
札幌市



なぜ今頃この歳になってと随分ためらったのですが、原爆投下3時間後に起きた被害の状況はどうしても書いておきたかったのです。

私は道北の和寒町の出身です。農業をやりながら地区の青年学校で軍事訓練を受けておりました。1944年8月25日、村役場の兵事係の人が来て、9月2日に広島市皆実町の船舶通信補充隊に入隊せよ、との通知書を持ってきました。

入隊してからはモールス信号、手旗信号などの訓練と野外訓練などを受けました。そして1945年6月4日、私は瀬戸内特設無線第一中隊に編入され、瀬戸内海を通る船との実用通信を行うために、仁保町の山の洞穴に大小の無線機を設置しておりました。

さて、運命の8月6日午前8時15分、私は夜間勤務を終えて下番し、戦友と洗濯中に異様を感じ、急いで表に出てみました。すると市内上空に黄色いような青いような雲が立ち込め、同時に生温かい強烈な爆風が吹いてきて、二人ともその場から吹き飛ばされてしまいました。何が起きたのかわかりませんでした。大変なことが起きたに違いないと思いました。20分くらい過ぎた頃でしょうか、あたりは次第に異様な雰囲気になり、うめくような声とともに、被災者の集団がこちらに向かってくるのです。それが次から次へと続くのです。みんな衣服は焼けてボロボロになり、皮膚はむけて垂れ下がっています。やけて誰一人人間らしい姿はなく、まともに見る事はできません。まさに人間幽霊の集団のようでした。彼らは段原から仁保を通して宇品の方へと歩いていきました。その光景を目の前にしながらも、私は何もしてあげることはできませんでした。その後あの人たちはどうなったのでしょうか。おそらく大勢の方が亡くなられたことと思います。このことは70年たったいまも鮮明に

思い出します。一生頭から離れることはありません。

翌日から私はふたたび普通の勤務にもどり、9月中旬まで続けました。ようやく10月2日に復員命令が出て解散、和寒町に帰ることになったのです。

その後農業に従事し1968年に札幌に移住しました。和寒に帰った頃、町の人々は私は広島だったから当然やられたらどうわさしていたようですが、幸いに私は直接被害は受けなかったのです。それでもなぜか円形脱毛症にかかったり脊髄が曲がっていると診断されたりしました。1983年になって、当時被団協事務局長の酒城さんに出会って被爆者手帳を受けることができました。現在運動機能障害で手当てを受給しています。

今考えますとあの爆弾が札幌に落ちたら札幌は壊滅してしまいます。今はもっと高性能の核兵器が作られていますから、そんな核兵器が使われたら人類は破滅しかねません。それを考えるとぞっとします。二度と核兵器が使われないように祈るばかりです。